

日本看護倫理学会第1回学術集会に参加して： 感想と期待

友竹 千恵

神戸市看護大学大学院博士後期課程

私は先日の日本看護倫理学会第1回学術集会に参加した大学院生です。現在、がんやその他の治療困難な疾患をもつ方々を対象とした病院に、外来看護師として勤務しながら学生をしています。ここでは、大学院生と臨床看護師、両方の立場から、本学会の感想と今後への期待を述べさせていただきます。

今回の学術集会はシンポジウムでした。参加前、プログラムを見たときに「なぜ、学会長の講演ではなくシンポジウムなのだろう？」と思いました。しかし、学術集会のテーマ「看護倫理のタペストリー：看護倫理の可能性をひらく」をみて、看護倫理を定義することではなく、参加した1人ひとりが、看護倫理というタペストリーを創る作業に参加することからスタートするのだ、というメッセージを読み取り、参加しました。シンポジウムにおける意見交換は実に活発で、色々な意見がありました。それらを見なで共有し考えるという会場全体の空気がありました。幅広い観点からの問題提起や実践報告がなされたことが、参加者互いの「看護倫理のセンサー」を刺激し、双方向のやりとりにつながったのではないかと思います。このような参加者同士の相互作用が、タペストリーのイメージに重なり合ってみえたのは私だけではないと思います。まさに看護倫理に関心をもつ人々のありようをあらわしていると思いました。

シンポジウムでは、「看護の法」「看護管理」「専門看護師の看護実践」「研究」「事例検討」

「実践現場」の観点から問題提起や実践報告がなされました。「専門看護師の看護実践」「事例検討」などは、自らの看護実践を振り返るよい機会となりました。たとえば、クリティカルケア看護領域の方のお話は、自分とは実践分野の異なる領域の報告だっただけに、領域特有なのか領域を超えたものなのかという視点で考える機会を頂きました。学生の立場からみると「研究」は、今後自らが研究を進めていくうえで、より突き詰めて考えたいと思う発見を頂きましたし、一方で、もっと詳しく聞いてみたいと思う部分もありました。たとえば「倫理についてまず必要なことは、物語を語ること、物語に耳を傾けること、それを言葉にすること」というお話では、物語を語るためには、語り手と聴き手が必要であり、語り手と聴き手がどのような状況で存在するかにより、語り手の物語も聴き手の言葉も異なってくるのではないかと思います。看護者は語り手の物語をどのように考え行動へと移すのか、そのことが看護倫理においてどのような意味をもつのだろうかということに興味がありました。

他の参加者の方の感想は、おそらく次のようなものではないかと思います。「看護倫理の学会はもうすでにあるものと思っていたが、今回が立ち上げとは意外」「看護倫理は敷居が高かったがそうでもなかった」「高齢者ケアやクリティカルケア等の特定領域の具体的な事柄も理論的なことも、どちらも看護倫理なのか」「病

院で働いていると、倫理的にどうかと思うことがある。この学会で手がかりを得たい」など。そして、多くの方が「私ひとりではないのだ」と感じたのではないのでしょうか。もちろん私もその一人です。

この反応は裏返せば、独りだと感じざるを得ないことを示しています。では、どんなときに独りだと思うのでしょうか。臨床看護師として、独りと感じる状況を、患者への看護を軸に考えてみました。まず、患者に関わる看護師が自分は無力なのではないかと感じたり、何をすればよいのか迷うことです。具体的には、患者の「こんなはずではなかった」という思いを知った瞬間や、患者の意思を確認できない場面、患者の意思はわかっているにもかかわらずそれが実現できない状況などです。もうひとつは、そのような思いを他の看護師に相談しても思うような反応が返ってこなかったり、これという策が見つからないときです。ともに考える仲間がいないと本当に孤独で、どうしたらよいかわからないまま、悶々とした思いだけが続きます。そして、仮に患者の思いを把握してそれを医師や他職種に伝えても、芳しい反応が得られず、患者の思いが叶えられない場合、無力感を感じます。

看護職であれば、誰でもこういう経験があるのではないのでしょうか。私は、臨床看護師のこのような戸惑いや悩みを分かち合い、解決への道筋を見出す場として、学会における事例検討のワークショップを提案します。私が今まで経験してきた事例検討でよかったと思えることは3点です。まず、日々の業務をこなすだけの私ではなく、私が看護を实践するこの場にいる理由や意味を考え、確認し、振り返る助けになります。次に、その場のメンバーとのやりとりから、看護実践上の困りごとに道を開く力が自然とわいてきます。ある事例検討がきっかけとなり、職種を超えた協力体制が生まれ、施設内のガイドライン策定へと発展したこともありました。さらに「ひとりぼっちの私」から、独りではないという思いへの変化を実感できる場になることもあります。

「事例検討はうちの病院でもしています」という声はあるでしょう。しかし、そのような取り組みをしている施設は多くはないと思います。看護職の働く場は多彩であり、小規模になればなるほど、あるいは、他職種と協働の職場であればあるほど、看護職が捉えた倫理的問題を表明し検討するのが難しい状況があるのではないのでしょうか。また、仮に職場で事例検討をしていたとしても、そこが自分の所属する組織だからこそ、対話がしにくい状況もあります。

「倫理的問題の事例検討は、がん看護や老年看護など、それぞれの領域で行えばよいのではないか」という考えもあるでしょう。専門領域で行うことのメリットは、同じ経験を持つ者同士の考察が、より専門的で個別なアプローチの創出につながるのだと思います。しかし領域を超えた検討は、領域固有のアプローチと、看護として共通のアプローチの違いを明確にするという格好の機会になると考えます。

学問としてどのような意義があるのかという疑問をもつ方もいると思います。現場にいますと、今ここで起きている問題の解決が急務であり、医療倫理の原則や看護者の倫理綱領、その他の指針などに照らし合わせて熟考するという思考は後回しといった感があります。さまざまな背景や立場をもつ人々と共に考えることで、臨床家には思考の引き出しを増やす機会になり、研究者にとっても、まさに今起きていることを知るよい機会になるように思います。つまり、実践の学問に携わるさまざまな看護職者にとって、知的な交流が期待できるのです。

また何よりも、生の事例を誰もが公平な立場で臨むことのできる学会の場で、事例から何かを学び看護に活かしたいと考える仲間の自律的な参加によって共有し、皆の知恵を結集してアプローチの道筋をつける作業することに意味があると考えます。それを実践現場に活かすという循環の蓄積が、他の学会参加者や、それ以外の看護職者に役立つだけでなく、やがて看護倫理という大きなタペストリーが紡がれるという大きな期待をもっています。

最後に、もうひとつの提案は、看護倫理の研究方法についてです。理論を開発するのか、現場で起きている事を明らかにするのかにより、研究方法は異なってくると思います。しかし、臨床看護師と学生という両方の立場で、日々の複雑な現象に見え隠れする倫理的問題に対し、どのように考え、判断し、行動したらよいだろうかと立ち止まると、原則や理論などを活用しようとしても、あちらを立てればこちらが立たずといった感があります。これらの理論は考えを整理するうえでの柱にはなりますが、実践上の指針としては不十分であるように思います。看護倫理として新たなタペストリーを創り出す

ひとつとして、たとえば、「看護倫理の研究手法の可能性」のようなセッションや、初学者向けに「看護における倫理を考えるための基礎知識」のようなセミナーがあればよいと思います。

本学会のスタートに参加したことは、自らの研究や実践を通し、看護倫理に関わっていきたいという思いを改めて確認するよい機会となりました。関係者の方々には短い準備期間だったと聞いています。しかし、あのシンポジウムで体験した参加者のパワーは、必ず広く豊かなタペストリーへと発展するだろうと確信しました。本当に多くのことを学ばせていただきありがとうございました。